

申請書の
5の専攻
名を【空
白】→【人
間発達科
学科】に
変更報告
番号

※ 第 号

主 論 文 の 要 旨

論文題目

前期ハイデガーにおい

氏 名

城田純平

論 文 内 容 の 要 旨

本稿は、1919年から1923年にかけてのいわゆる初期フライブルク期のハイデガーが展開した、「事実的な生 (faktisches Leben)」の哲学が、1927年に公刊された彼の主著『存在と時間』に至るまでの時期に、どのように処理されたのかを論ずるものである。具体的には、本稿では、初期フライブルク期に用いられていた「生 (Leben)」概念の内実が、『存在と時間』の時期にそれに代わって用いられるようになっている「現存在 (Dasein)」概念の内実と、どのように対応しているのかを検討すると同時に、ヴィルヘルム・ディルタイやマックス・シェーラーの思想がハイデガーに及ぼした影響に注目することによって、生概念の使用が取り止められた理由を明らかにする。

本稿の具体的な論述は、以下のように展開される。第一章では、初期フライブルク期から『存在と時間』の時期に至るまでのハイデガーの諸テクストを年代順に分析し、現存在概念が生概念に取って代わる過程を両概念の内実注目して論じる。その結果、概して初期には生が現存在に対して多用されていたものが、1923年夏学期の講義『存在論』を境にしてその使用頻度は逆転し、それ以降は一部の例外を除いてむしろ現存在概念がハイデガーの思索において中心的役割を果たすようになっていくことが確認される。また同時に、生から現存在へとテクスト上の表現が変更されていくことの背後で、両概念の根本規定は、これらの時期を通して一貫して「慮り (Sorge)」として概念化されていたことも指摘される。

第二章では、生と現存在の両概念を一貫して規定している「慮り (Sorge)」(ないし「慮ること (Sorgen)」)の概念を詳しく分析することにより、生と現存在がその内実において根本的な連続性を有していることが明らかになる。ただし、それと同時に、或る一点においては、初期フライブルク期から『存在と時間』に至るまでの間に、Sorgeが重大な変容を遂げていることも示される。具体的には、自己、他者、モノとの関わりという、初期フライブルク期の Sorgen の三契機は、たしかに『存在と時間』の Sorge にまで基本的に継承されているものの、ただし、自己との関わりのみは、他の二つの

契機と異なった概念的位置を占めるように変化しているのである。

第三章では、第一章で見てきたような生から現存在への転換が前期ハイデガーにおいて生じた理由を検討する。その結果、現存在概念を使用することが「存在への問い」を展開するハイデガーにとっていくつかのメリットをもっていたことが押さえられると共に、生概念を使用することの問題点についても、次の二つの考え方が提示される。一つは、人間学に特有の人間理解、すなわち、動物や植物の存在である ζωή に定位した上で、人間とは ζωή の中でも「言葉をもつ (λόγον ἔχον)」存在者のことである、とする人間理解への批判によって、ζωή の含意をもつ「生」の使用を取り止めたというものである (テーゼ A)。他の一つは、ディルタイの「生の哲学」——初期ハイデガーは「人間の実存」を含意する βίος としての生概念をそこから継承している——に対する批判の高まりによって生概念の使用を中止した、というものである (テーゼ B)。なお、この二つのテーゼは、後続する第四章と第五章でも継続して検討されることになる。

第四章では、上述のテーゼ A について、伝統的な人間理解の発想を踏襲している(とハイデガーにみなされている) シェーラーの哲学的人間学に対するハイデガーの関わりが論じられる。具体的には、次のように主張する先行研究が批判的に検討されることになる。当の研究によれば、『存在と時間』刊行から間もない 1929/30 年冬学期の『形而上学の根本諸概念』講義において、ハイデガーは哲学的人間学に急速に接近しているのだという。しかし、本章の議論を通じて、人間を、ζωή の意味での生を有するものの中でもとりわけ「精神 (Geist)」をもつ存在者として捉えるという、シェーラーの人間学における基本的な主張が、この講義のハイデガーによって依然として拒否されていることが示される。つまり、テーゼ A において指摘されていた、人間学一般に見られる人間理解に対する批判のポイントは、ここにおいても堅持されており、テーゼ A の主張は、1920 年代末の、シェーラーに対するハイデガーの関わりにまで視野を広げたときにも、いまだ有効であることが結論される。

第五章では、上述のテーゼ B について、『存在と時間』における二つのディルタイ論を軸に検討される。一つは、第 43 節における、ディルタイの『外界の実在性論考』に関する議論であり、他の一つは、第 77 節における、『ディルタイーヨルク往復書簡』からの抜書きを中心に構成されている議論である。ハイデガーがディルタイに対して批判的言及をする際の基本テーゼは、ディルタイは生の存在への問いに至っていない、というものであるが、これが具体的に何を意味しているのかという点が、この章では上の二つの箇所を詳細に検討することで究明される。その結果として、ハイデガーの次のような考えが明らかになる。すなわち、ディルタイは歴史的な存在者としての生へと向かう傾向を有しているものの、それにもかかわらず彼の内には、上のような傾向に逆らって事物的存在者の存在に定位してしまうという誤った方向性が忍び込んでい

るというのである。それゆえ、ハイデガーによれば、デイルタイは、生の存在について問うための条件である「存在的なものと歴史的なものとの間の類的差異」に無自覚であるため、けっして生の存在への問いへと至ることができない、ということになる。このように第五章では、テーゼ B で問題とされていた、ハイデガーのデイルタイ批判の内実が示される。

第六章では、『存在と時間』における死の実存論的分析が詳細に検討される。本章第一節と第二節の議論からは、ハイデガーが積極的に問題としている「死へ臨む存在 (Sein zum Tode)」、つまり「死亡すること (Sterben)」の諸契機が具体的に示される。それを踏まえた上で、第三節では、人間の「終わること (Enden)」に関する、Sterben とは異なった捉え方である「落命すること (Ableben)」という概念が提示されることになる。この Sterben と Ableben との相違は、Sterben が、自己に固有で、けっして現実化されえないような「可能性 (Möglichkeit)」としての死を問題にしているのに対して、Ableben は、自己に固有なものではなく、日常において日々経験しているような、「現実性 (Wirklichkeit)」に定位して考えられたところの死を問題にしている、という点である。そして、後者の Ableben は、人間学において問題とされるような ζωή に対応しているだけでなく、デイルタイや初期フライブルク期のハイデガー自身が問題としていた βίος にも対応していることが確かめられ、しかも、Ableben は Sterben に基づいているとハイデガーは主張しているため、つまり、死の分析によってハイデガーは、シェーラーらの人間学だけでなく、デイルタイや初期フライブルク期の自身が展開した「生の哲学」の乗り越えをも企図していたということが露わになるのである。

以上の議論を通して、本稿では次のようなことが結論される。まず、生概念の使用がハイデガーによって取り止められた理由は、ハイデガー自身が積極的に使用していた βίος の意味での生の概念的な内実に関わるものではなく、むしろ、ζωή を前提にして人間を構想するシェーラーらの人間学に対する批判や、その本来的な傾向の不徹底さのゆえに βίος の存在への問いに至らなかったデイルタイに対する批判に求められる。つまり、生概念は、いわば βίος の概念的な内実にとっては外的な事柄によってテキスト上から姿を消したのである。そして、初期フライブルク期の生を規定していた **Sorgen** は現存在をも根本的に規定していたわけであるから、βίος としての生は、実際に、その内実において捨て去られることなく現存在にまで継承されていたと言える。ただし本稿では、『存在と時間』における死の実存論的分析を検討することによって、現存在の「本来性 (Eigentlichkeit)」の分析においては βίος 概念では汲み尽せない事柄が問題にされており、いわばそこでは「生の哲学」の乗り越えが図られている、ということも示される。それゆえ、初期フライブルク期の βίος は、「本来性」における現存在ではなく、むしろ「日常性 (Alltäglichkeit)」における現存在へとつながっ

ていたということになる。以上のように、本稿では、初期フライブルク期のハイデガーによって展開された事実的な生の哲学が、『存在と時間』へと継承されていることが主張されると共に、『存在と時間』ではその乗り越えが同時に図られていたということも最終的に示唆される。



